

「子どもの居場所」は
地域のセーフティネット！

With「コロナの時代。追いつめられる子ども達。昨年9月東村山・生活者ネットワークで実施した「コロナ禍においてのアンケート」で、行き場を失った子ども達の様子が浮き彫りになった。「何か、私たちにできることはないのか？」を探るため、西東京市でコミュニティレストランが実施している子ども支援の様子を見に伺った。



「木・々(もく・もく)」の場合

生活者ネットワークの市議会議員だった鈴木美紀さんは、ネットのルールに基づき次の議員にバトンタッチした後、地域に政治談議のできる場所を作りたいと「コミュニティレストラン『木・々』を9人の仲間たちと資金を出し合って立ち上げ20年

になる。ランチやカフェをはじめ、絵手紙・俳句・健康麻雀・映画など食べて・集う多世代の居場所としてメニューは多彩。2013年にはケアラズカフェを、2015年まちの縁がわ※に加入し子ども食堂も始めた。毎月1回、幼児から高校生に無料で毎回40食を用意して喜ばれている。

2018年宿題ルームの開設

学校でも、塾でも、家でもない、
子どもにとって居心地のいい居場所

向かいにある公立小学校の児童に向けて、無料の宿題ルームを始めた。学童に入れず放課後、家で一人で過ごす子ども達が多く、保護者が困っているという現状を知り、みんなで宿題ができるようにと、ボランティアの元教師のメンバー3人や大学生の応援も得て週2回実施している。1年生から4年生まで、宿題やつまづきをサポート。当初は思うように子ども達が集まらなかったが、校長先生が代わりチラシ配布やポスターを貼らせてもらえることで参加者が定着してきた。

学校で気になっている子が通っているのをみた校長先生がドリルをもって来たというから、いかに頼りにされているかがわかる。が、「学校の下請けではない」と「発見と寄り添い」を信条としているとの弁が温かい。

一斉休校で突然給食がなくなった！

「コロナ禍での挑戦」

学校給食が頼りだった子ども達に「子ども無料弁当」の配布を始め、2か月で222個を提供し

た。何もしなかった国や都に代わり、自腹を切ったことだ。その後約半年間は都の「感染拡大防止協力金」が市の「子どもの食支援費」として受給され活用できたが、何の補助もなくなった現在、継続はかなり厳しい。「持続化給付金」の対象外だったことへの怒りを新聞に投稿したことがきっかけで、TVの取材も受け、市民からカンパも届いたり、現状を知ってもらえて、なんとか続けてこられた。

まずは始めてみる事...

「水飲ませて」「トイレを借りるよ」と児童や通りがかりの年配の男性がふらっと寄っていく。「子どもの居場所は、同時に自分たちの居場所にもなっている」と語る鈴木さん。

世代を超えたいろいろな人々の居心地のいい場所が、求めるところ。仲間と知恵を集めて、まずは始めてみることに。想いを形にするこの勇気をもらった。東村山にも、作りたいと動き始めた。あなたも参加しませんか。



宿題ルームの様子



宿題ルーム開始前にスタッフで打合せを

※まちの縁がわ：A.C.I.A.ピリテイククラブ(すけあい)が都内各所で開設している、相談・ほっとサービスの機能を備えた居場所。東村山にも本町・恩多町にあり、美住町にはサテライトもある。